



メタデータ項目	社会経営ジャーナル第4号掲載論文
題名 Title	箸墓古墳の被葬者は？
作成者 Author	小林 公子
雑誌名 Citation	社会経営ジャーナル, 2016, Vol.4, pp68-73
発行者 Publisher	放送大学社会経営研究編集委員会
ISSN	2188-1073
巻	Vol.4
ページ	pp68-73
発行年	2016
URL	<a href="http://u-air.net/SGJ/pub/20161101J-Kobayashi.pdf">http://u-air.net/SGJ/pub/20161101J-Kobayashi.pdf</a>

## 箸墓古墳の被葬者は？

小林 公子

### 要旨

奈良県のほぼ中央、三輪山にほど近い平地に作られた巨大な古墳、「箸墓古墳」と呼ばれるが、この古墳には種々の謎が秘められている。宮内庁が管理し、被葬者は「ヤマトトヒモソヒヒメノミコト」と称されているが、規模の大きさから当時の大王クラスの人物と推定され、近年、土器の年代測定の見直しなどで造営は三世紀半ば頃とされる。ほど近い纏向地域に大型の建物群の遺跡が発掘され、それが、卑弥呼の治世の時期とほぼ一致し、従来、否定的であった被葬者卑弥呼説が有力になっている。

箸墓古墳の造営の様を描く『日本書紀』の「三輪山伝説」、さらに同時代の文字資料である中国の歴史書『魏志倭人伝』には「邪馬台国」や「卑弥呼」に関する記事から、当時の政治、暮らしなどが知られ、前期もの大型建物群も「宮室、楼観、城柵、厳かに設け」と記される卑弥呼の住居に相当すると考えられる。また卑弥呼の死についても記される。

そうした「三輪山伝説」や『倭人伝』の記事からして、やはり箸墓古墳の被葬者は、卑弥呼であろう。箸墓周辺で発掘された土器の年代が、卑弥呼の時代より新しいという意見は現在も存在し、被葬者は確定していない。被葬者の確定は古墳の発掘を見なければ不可能かもしれない。しかし、古墳の規模、古代の文字資料などからして、箸墓古墳の被葬者は卑弥呼であると、私は考えている。

はじめに

三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや

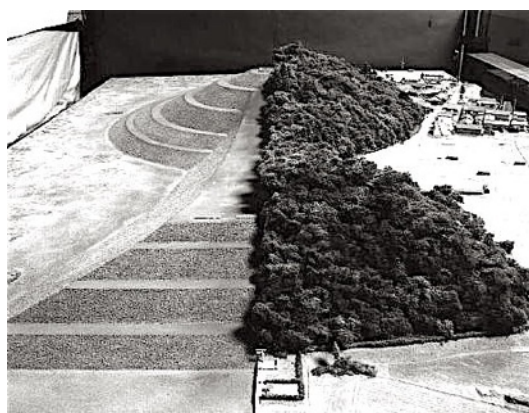
この歌は、『万葉集』1-18に掲げられた額田王の歌である。山上憶良の『類従歌林』には、『都を近江国に移せしときに、三輪山を御覧たまひし御歌なり』と、近江遷都に際し天智天皇の詠まれた歌であると記している。『日本書紀』には、「六年丙寅の春三月辛酉己卯、都を近江に遷しき」との注が付いているが、天智6年（667）3月の近江遷都に接し、住み慣れた大和の地を離れる時、三輪山に別れを告げた歌である。古くから天智天皇の作と認められていたらしい。白村江の戦いに敗れ、長く都であった大和の地を離れる時、天皇を始めとして、多くの官人たちは、大和の象徴であった三輪山との別れを惜しみ、共通の哀惜の情を込めて詠まれた歌であろう。古代から三輪山は、大和の国の象徴として朝な夕なに仰ぎ見る山であったのだろう。

現在も三輪山の麓に大神（おおみや）神社が祀られている。この社には、立派な拝殿は存在するが、本殿はなく、三輪山そのものが大神神社の御神体である。山中には古代の祭祀のあとなども残され、三輪山は古代から現在に至るまで大和の地の聖なる山として信仰の対象とされている。

この三輪山の麓、平地の中に際だって、ポツンとこんもり茂った小山の姿が見かけられる。これが箸墓古墳である。3世紀後半に建造された巨大な前方後円墳であるが、被葬者については確定されていない。誰の墓だろうか。

## 1 箸墓古墳

奈良県桜井市大字箸中に位置し、現在は宮内庁が、「大市墓」「ヤマトトヒモソヒヒメノミコト」の御陵として管理し、研究者を始め一般人の立ち入りなどは禁止の処置が執られている。この姫命は第7代孝霊天皇の皇女とされている。



(第1図) 箸墓古墳の模型 (国立歴史民俗博物館)

墳丘の長さは278m、高さ30m、全国で第11位、奈良県でも第3位の規模をもつ大きな前方後円墳であり、とても一皇女の墓とは思えない。(図1)は、国立歴史民俗博物館に展示されている箸墓の模型であるが、向かって左半分が築造当時、右半分は現在の様子を示している。おそらく大王クラスの者の墓であろうと推測され、邪馬台国の卑弥呼、壹與、そして崇神天皇などが候補者としてあげられている。この地方には景行天皇陵とされる渋谷向山古墳、崇神天皇陵(行燈塚古墳)などの巨大な前方後円墳も存在するが、これらが、いずれも自然の地形を利用して造られているのに比べ、箸墓古墳は自然の地形を利用せず、平地の中に小山が築かれている。巨大なクレーンや大型ダンプカーが活躍する現代とは異なり、一

切、機械や動力に頼らず、あくまで人力のみで築き上げられた姿は、まさに驚異というほかはない。

箸墓という名は、『日本書紀』巻第五 崇神天皇条の「三輪山伝説」と称される中に記されている。「ヤマトトヒモソヒヒメノミコト」が、大物主神の妻となり、夫は、夜のみ来るので、「君常に昼はみえたまはねば、分明(あきらか)に其の尊顔を視ること得ず。願はくは暫留りたまへ。明旦に、仰ぎて美麗(うるは)しき威儀を觀(み)たてまつらむ」。夫、「言理灼然(ことわりいやなこ)なり。吾明旦に汝が櫛笥に入りて居らむ。吾が形に驚きましそ」と、翌朝「ヒメミコ」は、櫛箱に入った小さな蛇に驚き叫ぶ。大神は人の形になり、「忍びずして吾に差せつ」と言い三輪山に登ってしまった。姫命は羞じて、ホトを箸で突いて亡くなった。それ故、箸墓の名が付けられたと記す。

しかし、『魏志倭人伝』に「食欲には籩豆(へんとう)を用い、手食す」と、邪馬台国では、手づかみで食事をしていた様が記され、また、箸の伝来は7世紀頃ともいわれており、3世紀頃には箸は無かったなどの指摘もある。この地域は「箸中」という地名であり、「箸中山古墳」とも呼ばれているので、箸墓は、この地名によっても考えられる。

『日本書紀』が語る三輪山伝説の最後には、

是の墓は、日(ひる)は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石則ち山より墓に至るまでに、人民(おほみたから)相踵(あひつ)ぎて、手遞傳(たごし)にして運ぶ

と、古墳造営の様子が描かれている。巨大な古墳の建造に、多くの労力が費やされたことが想像される。おそらく昼夜の別なく作業が続けられたことであろう。



書紀が世に出た時代、8世紀前半は、古墳の出現からすでに400年以上の時間が流れている。現在に換算すれば18世紀前半、江戸中期、享保年代のことになる。8世紀には文字も使用され、記録も残すことが出来た。それでも400年以前の出来事を正確に伝えるのは難しいことであつたろう。古墳の出現が3世紀中葉から末期あれば、文字の使用も記録を残すことも出来ない時代、その驚異的な造営の様を、神の助力によると記したとも考えられる。

しかし、すでに文字を有し、この時代の我が国の様子を記した書がある。それが『魏志倭人伝』と称する中国の歴史書である。この書の中に、3世紀頃の我が国の様子が「邪馬台国」「女王卑弥呼」などとして記されている。

## 2 『魏志倭人伝』と記される邪馬台国と卑弥呼

『魏志倭人伝』と称されるが、これは俗称で、正確には『三国志』の中の「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝、倭人の条である。『三国志』は、3世紀前半から後半にかけ魏・呉・蜀三国時代の歴史書で、著者は西晋の人、陳寿。3世紀末、(280年～297年)の発行である。倭人伝という独立した列伝はなく、東夷伝の中の倭や倭人の記述を、倭人伝としている。中国の正史のなかに邪馬台国に関する記事が纏めて書かれおり、3世紀頃の様子を知ることが出来る。

この書中、倭のことを記録した部分の最初には、帯方郡から倭国への水路や行程を記し、位置関係をとらえることが出来るが、その解釈は難しく、はっきり邪馬台国の位置を特定することは困難である。そこで邪馬台国「九州説」や「大和説」などが生じ、長い間論争されることにもなる。佐伯有清の『研究史 邪馬台国』にも、「邪馬台国位置図 大和説と九州説」として邪馬台国の位置が示さ

れており、「九州説」として、新井白石の筑後山門郡、近藤義郎の菊池郡山門郷などが掲げられている。

次いで、邪馬台国の男女の生活様式、服装、風俗などが、かなり細かに述べられ、さらに邪馬台国と諸外国との交易の様なども記されている。

卑弥呼については、

其の国、元亦、男子を以て王と為す。住まること七、八十年、倭国乱れ、相功伐すること歴年、乃ち一女子を共立して王と為す。名を卑弥呼と曰う。鬼道を事とし、能く衆を惑わす。年、己に長大なるも、夫婿無し。男弟有りて国を佐け治む。王と為り自り以来、見る事有る者少なし。婢千人を以て自ら侍らしむ。唯、男子一人有りて、飲食を給し、辞を伝えて居所に出入す。宮室、楼観、城柵、巖かに設け、常に人有りて兵を持ちて守衛す。

と、其の様子が詳しく述べられ、最後にその居所の様が記される。

『魏志倭人伝』のなかで箸墓古墳を連想させる記事としては、最後の部分に、

卑弥呼、以に死し、大いに「つか」を作る。径は百余歩、徇葬する者、奴婢百余人なり、

とあり、死亡の年月は明確に記されていないが、別の伝記中に『正始中』と記され、正始の年号は十年までで、正始十年四月に嘉平元年(249)に改元されるから、卑弥呼の死は248年前後とされている。

箸墓古墳の埋葬者を卑弥呼とする説は以前から存在したが、多く

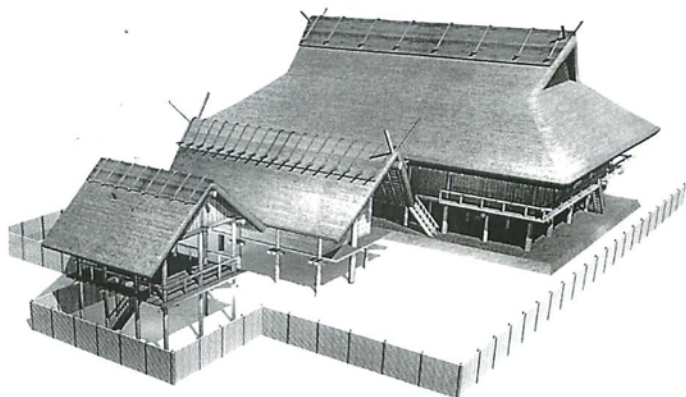
の研究者たちは否定的であった。埋葬者についてのいきさつを探る。

### 3 箸墓古墳の埋葬者は？

日本列島における前方後円墳の出現は、3世紀末・4世紀初めというのが、従来の研究者たちの代表的な考えで、被葬者としての卑弥呼とは時代が合わず、可能性が少ないという意見が支配的であった。

しかし、箸墓から近い纏向地区の古墳に、古い土器が発見され、前方後円墳が、この地域でも3世紀前期から造られていたことが明らかにされると、箸墓の造営も3世紀半ばと考えられ、卑弥呼埋葬の可能性もあると変わっていった。

それでも、まだ、やはり箸墓の建設年代を4世紀中葉という説も残存していたが、卑弥呼説が強く唱えられるようになったのは、ほど近くの纏向地域に、平成21年（2009）11月、東西12.4m、南北19.2m、この時期最大の大型建物の遺跡が発見されたことも大きな力になる。



(図2) 大型建物群 復元模型 設計黒田竜二  
『邪馬台国と纏向遺跡』より一部修正  
建物左方より B C D

この建物は、Dと呼ばれ、従来から発見された建物B・Cと、三つの建物の中心軸が東西軸に並んでおり、Dは高床式である。この建物群は黒田龍二氏によって復元模型（図2）が作成されているが、Dは、この時期最大の床面積を持つと考えられ、この大きな空間は、居住空間的な機能をと考えられる。この遺跡群はヤマト王権の初期の政治的中心地と位置づけられるようになる。

遺跡は3世紀はじめに出現し、中葉から後半期に最盛期を迎え、4世紀初めには衰退してしまう、ほぼ百年ぐらいの遺跡と推定されている。最盛期がほぼ卑弥呼の時代と一致すること、『魏志倭人伝』に記す「宮室、楼観、城柵、巖かに設け」に対応する建物群と考えられている。

こうした卑弥呼の時代に相応する遺跡も発掘されたが、まだ箸墓の埋葬者は卑弥呼とは限定されていない。古墳の周辺から発掘された土器の年代が、もう少し後の時代だという。箸墓の被葬者は誰かの解明は、古墳の発掘調査を実施しなければ不可能なのかもしれない。これは現在の宮内庁の考え方からして当面は難しいであろう。

### 3 箸墓に近在するホケノヤマ古墳

ホケノヤマ古墳は箸墓の東方300mに位置する古墳である。私がこの地域や考古学そして古代史などに興味を持ち始めたのは、このホケノヤマ古墳の現地説明会に訪れたときからであった。

巻向駅から現地に向かう人の多さにまず驚いた。初めて訪れた古墳、発掘状況と古墳の構造についての説明、朱色が残す木槨など、初めて見る古墳内部の様子などに興奮した。

多くの人が詰めかける会場にも熱気があふれていた。近くのテントの中には鏡などの発掘品が並べられ、間近で視ることも出来た。遠い遠い昔の遺物を眼前にして感激もした。関西の人はいいなあ。簡



単に行けて。そんな想いを抱きながらの帰り道、ふと目の前にした池と小山、それが箸墓古墳であった。こんな所にも古墳があるんだ。それにしても随分大きいなあ。それが箸墓との出会いであった。

ホケノヤマ古墳の築造時期は3世紀の第2四半期(225~250)、箸墓より、すこし古いらしい。ホケノヤマを卑弥呼、箸墓を壹與の墓と考える説もある。石積木槨の中に刳拔式木棺が収められていた。ホケノヤマも立派な前方後円墳である。しかし、その規模はずっと箸墓が大きい。二つを比べてみると、やはり卑弥呼の墓は、箸墓だと思われる。

#### 終わりに

こうして現地説明会で古墳に興味を持ち、考古学や古代史の勉強も始めた。『日本書紀』や『魏志倭人伝』を読み、邪馬台国、卑弥呼、そして箸墓の由来を知り、いろいろな空想も抱くようになった。

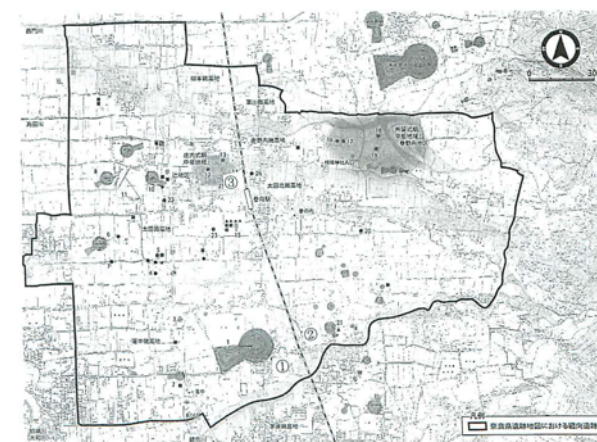
箸墓は、やはり卑弥呼の墓、そして卑弥呼と「ヤマトトヒモソヒヒメノミコト」は同一人ではなかろうか、と考える。この説は私だけでなく、すでに大正時代に笠井新也という人が掲げ、近年は白石太一郎なども述べている。卑弥呼は「ヒメミコ」であろう。我々日本人にとっても長い、ややこしい名前はなかなか覚えることは難しい。まして外国人にとっては、省略して卑弥呼としたのではないだろうか。

そして、『魏志倭人伝』の「径は百余歩、徇葬する者、奴婢百余人なり」の卑弥呼の墓の記事、また『日本書紀』の「日は人作り、夜は神作る。故。大坂山の石を運びて造る。則ち山より墓に至るまでに、人民相踵ぎて、手遞傳(てごし)にして運ぶ」の記事も、箸

墓の造営の様を伝える。大坂山は二上山の北側の山とか、箸墓の石の中に二上山周辺の岩石が見いだされるから、かなりの距離のある土地から石は運ばれたのであろう。

手遞傳は、列を作り、手から手へ渡す様、私には戦時中の防空訓練のバケツリレーが思い出される。焼夷弾の消火には全く役に立たなかった行為だが、口もきかなかつた近所の人たちと一緒に、必死で行った幼い日の様がかぶ。同じ目的に向かって、一丸となり一致団結の効果は存在した。おそらくこの時代の人たちも、卑弥呼の死を悼み、一致団結して墓の造営に当たった。石を手遞傳で運ぶことなど、とても出来そうでない大変な作業であるが、神の手を借りてまで造営したという記事も、当時の人たちの墓造営の意識を物語るものであろう。

こうした様を考えると箸墓は、絶対に卑弥呼の墓だと思われる。『日本書紀』の三輪山伝説の「ヤマトトヒモソヒヒメノミコト」は自殺するが、卑弥呼も責任を取り、きっと自ら死を選んだのでなかろうか。「鬼道を行う」という卑弥呼、確かに、こうした行為は、老いるに従って衰えを感じさせるもの、こうした卑弥呼の死を悼み、卑弥呼の功績を讃える人たちの手で立派な墓の建造がなされたと考えたい。



(図3) 龍向遺跡図 (桜井市龍向遺跡・龍向古墳群保存活用計画書より)  
① 箸墓古墳 ② ホケノヤマ古墳 ③ 大型建物群

箸墓古墳に眠るのは卑弥呼である。大和政権発祥の地には、戦乱の様子は見当たらないそうだ。平和裏に各地の豪族たちと手を結び、国という新しい政治形態の礎を築いたと思われる卑弥呼、箸墓はまさに、その墓としてふさわしい墓だと言いたい。

桜井市は、来年度からこれら纏向の遺跡・古墳群（図3）の保存活用を策定している。かなり広い地域であるが、どんな保存活用が行われるのだろうか。楽しみである。

三輪山の大きな山容を眺めながら、地下に静かに眠る卑弥呼も、きっと完成を楽しみにしているであろう。

#### 参考文献

- 石野博信著 『邪馬台国と古墳』 2002年 学生社  
 石野博信外著 『邪馬台国と纏向遺跡』 2011年 学生社  
 一瀬和夫著 『巨大古墳の出現』 2011年 文英堂  
 小椋一葉著 『箸墓の歌』 2004年 河出書房新社  
 佐伯有清著 『魏志倭人伝を読む』 上 2000年 吉川弘文館  
 佐伯有清著 『魏志倭人伝を読む』 下 2000年 吉川弘文館  
 佐伯有清著 『邪馬台国論争』 2006年 岩波書店  
 坂本太郎外校注 『日本書紀』 上 1997年 岩波書店  
 桜井市教育委員会文化財課編 『桜井市 史跡 纏向遺跡・史跡 纏向古墳群』  
 2016年 桜井市  
 桜井市纏向研究センター編 『纏向出現』 III 2014年 奈良県桜井市  
 桜井市纏向研究センター編 『纏向出現』 IV 2016年 奈良

#### 県桜井市

- 桜井市文化財協会 『纏向その後』 2015年 桜井市文化財協会  
 佐竹昭広外校注 『万葉集』 1999年 岩波書店  
 高倉洋彰著 『箸の考古学』 2011年 同成社  
 直木孝次郎著 『邪馬台国と卑弥呼』 2008年 吉川弘文館  
 土生田純之著 『古墳』 2011年 吉川弘文館  
 東潮著 『邪馬台国の考古学』 2012年 角川学芸出版  
 広瀬和雄著 『前方後円墳の世界』 2010年 岩波書店  
 藤原健二著 『邪馬台国』 2012年 新紀元社  
 森浩一編 『日本の古代』 第5巻 前方後円墳の世紀 1986年 中央公論社  
 森浩一著 『倭人伝を読みなおす』 2010年 筑摩書房